

博物館だより

第60号

2004.3.20

Nagano City Museum

第49回特別展『川中島の戦い—いくさ・こころえ・祈り—』

第1期 4月29日(木)～6月13日(日) 第2期 7月25日(日)～9月5日(日)

長野市立博物館・真田宝物館同時開催



今年4月の松代城の整備完成を記念して、特別展『川中島の戦い—いくさ・こころえ・祈り—』を長野市立博物館、真田宝物館の2会場で同時に開催します。

松代城築城のきっかけは、越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、川中島の地で戦を繰り広げる中、武田方の拠点として築かれた海津城が始まりです。

また、博物館の建つ八幡原史跡公園は、第4回とされる永禄4年の戦いの激戦地ともいわれ、松代、八幡原の地に上杉謙信、武田信玄両将の名宝が再びあいまみえることとなりました。

ここでは、特別展の見所をいくつか取り上げてご紹介します。
(降幡浩樹)

松代城整備完成記念フォーラム『よみがえった松代城』

6月12日(土) 午後1時30分から午後4時 (会場 松代文化ホール)

松代城の整備にたずさわってこられた先生方をパネラーに、松代城の特徴を歴史、建築、石垣など、ご専門の立場から語っていただきます。

お申し込みはハガキか博物館受付で直接申し込み用紙にご記入下さい。

1. 描かれた川中島の戦い



▲①上杉謙信と武田信玄の一騎打ちの場面
(川中島合戦図屏風 和歌山県立博物館蔵)

「川中島の戦い」と聞くと、皆さんはまず何を想像されますか？上杉謙信と武田信玄の一騎打ちを思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。表紙は、ミュージアム中仙道所蔵の川中島合戦図屏風に描かれた両将の一騎打ちの場面。写真①は和歌山県立博物館の合戦図屏風の同じ場面です。

表紙は馬上から太刀を振り下ろす謙信を、床几しょうぎに座った信玄が軍配で受け止めるもの。①は川(御幣川)の中で、互いに馬上で太刀を交える場面となっています。同じ一騎打ちでもイメージは随分ちがいますね。実は表紙と①のいずれの屏風も上杉方を強く意識して描かれたものなのですが、こうした構図の違いはどうして生まれたのでしょうか？

今回の展示では、現在知られている主な川中島合戦図屏風6点を、4月29日からの第1期と、7月25日からの第2期で2週間ごとに入れ替えて展示します。なぜ一騎打ちの構図の違いが生まれたのか、各々の合戦図屏風には何がどのように描かれているのか。ぜひ実見していただければと思います。この合戦図屏風に関する記念講演を5月16日午後2時から、長野市勤労者女性会館しなのきの多目的ホールで行います。講師は茨城大学助教の高橋修氏。ぜひご期待ください。

2. 戦の勝者は謙信、信玄？一両将の宣伝合戦

川中島の戦いは、よく知られた永禄4年(1561)9月10日の合戦一度だけではありませんでした。上杉、武田の両将は天文22年(1553)から永禄7年(1564)までの12年間、北信濃の各地で5回に及ぶ対陣、衝突を繰り返したといわれています。「川中島の戦い」とはその総称です。

写真②は激戦とされる永禄4年9月10日の合戦から3日後に、上杉政虎(謙信)から越後関郷(新潟県関川村)の地侍、垂水源二郎宛てに出さ



▲③武田信玄書状(山ノ内町温泉寺蔵)

れた感状で、俗に「血染めの感状」と呼ばれる史料です。大きさは縦15.6×横18.4cmの小さなものです。ここでは「兇徒数千騎を討捕え、大利を得、本望を得ることができた。あなたの働きは一生忘れない。今後も忠節をつくすように」と締めくくられています。同様の上杉方の感状は他に6点知られています。

一方写真③は、下高井郡山ノ内町温泉寺に伝わる武田信玄から京都清水寺の成就院に宛てて出された文書です。日付は10月晦日、合戦後約1ヶ月半後に書かれました。温泉寺に伝わった経過は不明ですが、この書状には武田方が敵の首3,000余人



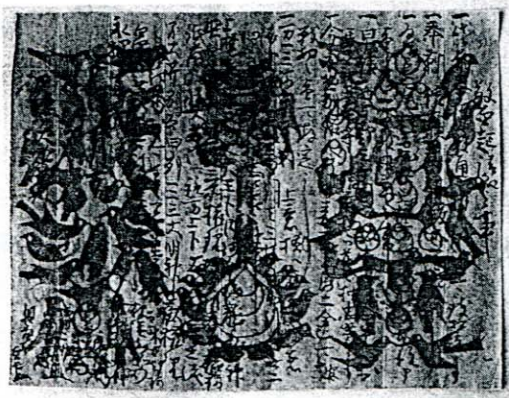
▲②上杉政虎感状
垂水昭氏蔵(せきかわ歴史とみちの館寄託)

を討取ったと自軍の勝利を宣伝しています。はたして本当に勝ったのはどちらでしょうか？いくさ直後の誇大な表現を含んだこうした感状だけでは勝敗の判断はつきかねます。この第4回の戦いは、お互いに双方に壊滅的な打撃をあたえることが出

来ずに、最終的には武田信玄が飯山以南の信州をほぼ手中に収め、以後主たる戦場は関東、駿河へと移ることにより、川中島の戦いは終息に向って行きます。

3. 信濃の武士と川中島の戦い

川中島の戦いを語る場合、とかく謙信と信玄に目が向けられますが、北信濃の武将や民百姓にとって、川中島の戦いはどんな戦いだったのでしょうか。



▲④麻績清長起請文（生島足島神社蔵）

写真④は上田市下之郷の生島足島神社に伝わる起請文と呼ばれる戦国時代の誓約書です。この文書は、永禄9年（1566）から同10年にかけて、武田信玄配下の戦国武将236人が、信玄に対する忠誠を神に誓った起請文83通の内の1通です。起請文を提出した236人のうち、約55%にあたる130人が信濃出身の武将と考えられています。信玄の家臣団の中で、信濃の武士はいつ信玄を裏切り、上杉方に寝返るか気の置けない存在だったということでしょうか。

写真の差出人、麻績清長は筑摩郡北部の麻績を根拠とする一族で、麻績は川中島と府中（松本市）を結ぶ交通の要衝にあたりました。清長は230余人の内ただ一人、8月7日、8日と2日続けて起請文を書かせられた人物です。また誓約の文言も他の武将と異なり、上杉輝虎（謙信）の他に小笠原・村上義清からの誘いに同心しないこと、地元の土豪と入魂にしないこと、特に屋代・室賀・大日方と個人的な交際をしないことなどを誓わせ、警戒されていました。

しかし、これらの文書を信濃の武士の立場から

読み直せば、一族、家族の生き残りをかけ、上杉と武田、もしくは信濃の武将のはざまで、厳しく葛藤し、生きる道を模索する姿が浮かんできませんか？署名の下に押された血判は、生きることへの決意の証ともいえます。

写真⑤は、先に①で見た和歌山県立博物館の川中島合戦図に描かれた一場面です。ここには、塩崎の農民が越後軍の小荷駄隊を襲い、俵などを略奪している場面が描かれています。信濃の民百姓も、戦場で一方的に搾取^{さくしゅ}されていたわけではなく、時には団結して武士にも襲い掛かるという強い抵抗をみせていたのです。

④、⑤の資料からは、信濃の領民も信玄や謙信の侵攻を座視していたわけではなく、それを食い止めようと努力し、その結果一族や家内の分裂を起し、従属、亡命の選択に迫られながら、領国の安定を望んでいたと思われます。



▲⑤川中島合戦図屏風（和歌山県立博物館蔵）

今回の特別展では、上杉謙信と武田信玄の名を「いくさ」「こころえ」「祈り」のテーマに分けて展示します。両将の資料が一堂に会すこの機会に、一つ一つの資料との対話を通して、これまでのイメージと少しでも違った川中島合戦像が見えてくればと思います。

（降幡浩樹）

茶臼山における夜間動物撮影

茶臼山自然史館の位置する茶臼山は人の生活と自然が密接に関係した環境です。その里山環境に生息する野生動物を撮影することで、自分たちの身近にどのような種類の動物が生息しているのかを子どもたちに伝えるために、夜間動物撮影を平成15年11月初旬から茶臼山自然史館と茶臼山動物園の共同研究として開始しました。

夜間の撮影は赤外線付カメラを用意しました。カメラの前を動物が横切ると自動的にシャッターが落ちる仕組みです。フィルムは市販品を使用しています。現在の撮影場所は茶臼山動物園内及び自然史館周辺で行っています。撮影は人影の無くなる夜間から翌日の朝までカメラを設置する方法をとっています。設置する場所は降雪後に残された足跡の多い場所や、通るであろうと推測した場所にカメラを置きます。現在までに撮影した動物は、ハクビシン、タヌキ、キツネ、テン、ノウサギの5種類です。特にタヌキが多く撮影されており、他種と比較しても撮影枚数も圧倒的に多くなっています。逆にウサギやハクビシンは撮影を開始してから数ヶ月たちますが、両者の撮影枚数は他と比較すると極端に少なくなっています。これらについてはいろいろ仮説を立てることができませんが、今後の広範囲における撮影・生態調査によって理由を明らかにすることができると思います。

今後の調査予定としては、現在撮影を行っている場所からさらに範囲を広げ、農家の方々にカメラ設置場所の提供をお願いし、田畑などの周辺での夜間動物撮影や、可能な限り茶臼山全域で撮影を行います。また、自然史館及び動物園職員が基本的には野外調査を行います。調査に興味があり参加してみたい子どもたちを対象とした調査体験教室なども開催する予定です。内容としては、皆さんが普段通っている場所から少し^{やぶ}の中に入った場所での作業や茶臼山を散策しながら動物のフィールドサイン（足跡、^{ぶん}糞etc.）を探します。発見した場合には地図にどこに、どんな種類の動物のサインがあったかを地図に記入します。その地図に夜間撮影を行った場所を重ね合わせ、動物分布図を作成します。同様に植物分布調査も行い、どの場所にどんな樹木や草本があるかの分布図を作成したいと考えています。それらを1つに重ね合わせるにより、茶臼山にはどのような特徴があるかを子どもたちに発見をしてもらい、かつ、来館していただいたお客様にも理解しやすいような茶臼山全域の動・植物分布図を作成したいと考えています。動物・植物・調査に興味のある方は是非ご参加ください。

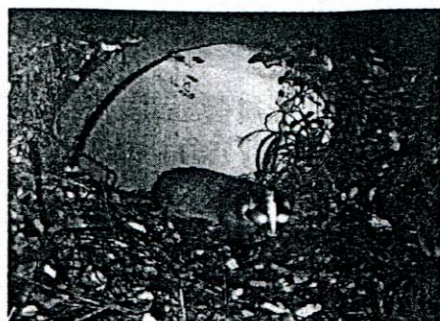
（北原克宣）



▲カメラの前を横切るノウサギ



ひんぱん
▲頻繁に撮影されるタヌキ



▲土管から出てきたハクビシン



▲柿をくわえるキテン

友の会10周年記念誌刊行

長野市立博物館友の会ができたのは平成5年6月1日でした。平成15年はちょうど設立10周年にあたり、その節目として10周年記念事業を実施しようと企画したのが平成15年3月の友の会運営委員会でした。そして記念事業の柱として位置づけられたのが記念誌刊行でした。

記念誌刊行部会で協議し、10年の歩みを目で見てわかるように写真を多用したものにしようということになりました。いろいろ検討した結果、「友の会10年の軌跡」（友の会活動10年の記録）、「友の会同好会活動の歩み」（各同好会の設立経緯、活動の歩み）、「10周年記念事業の記録」（博物館まつり・見学旅行・記念講演会）の項目を柱にして構成し、刊行することとなりました。

博物館をめぐる社会状況はこの10年で大きく変わってきました。市民とのパートナーシップやボランティア活動の展開が博物館活動に重要な要素となってきました。まさに博物館が社会に果たす役割が問われているといえます。また同時に博物館友の会の社会的な存在と役割も問われていると思います。

この記念誌が単に博物館と友の会の懐古趣味に終わるのではなく、友の会の新たな未来を志向する上で有効な素材となるべく、確実な活動の「記憶」にしていきたいと考えています。博物館と友の会のパートナーシップを構築する上でこの記念誌が役割を果たすことを期待したいと思います。

（友の会事務局 山口 明）



博物館公式ホームページがオープンします

2004年4月に長野市立博物館のホームページを開設しました。博物館の常設展示室やプラネタリウムの情報の他、特別展をはじめとして博物館でこれから行われる行事を網羅しています。

また過去に行われた行事なども一部掲載されていますのでご利用ください。また、分館の茶臼山



▲自然史館の
トップページ

自然史館や門前商家ちよっ蔵おいらい館の詳細情報も見ることができます。

「八幡原史跡公園散歩」や「茶臼山の自然」などのお得な情報もたくさん入っています。じっくりとご覧になってください。（大蔵 満）

★長野市立博物館ホームページ

<http://www.city.nagano.nagano.jp/ikka/e-bunka/>

[museum/index.html](http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/index.html)



▲博物館の
トップページ

みなさんのお宅にはお札やお守りが祀^{まつ}られたり、貼^はられたりしているのでしょうか？神社やお寺から出されるお札は、見た目は薄っぺらな紙片に過ぎませんが、その一枚一枚に神仏の呪^{しゅ}力が込められた特別なもので、これを身近に置いておけば諸々の災難から逃れることができると考えられてきました。現在ではお札にこのような考えを抱くことは少なくなってきていますが、今でも家の神棚や玄関口、お勝手などにお札を貼っている家は多いのではないのでしょうか。

◆古くなったお札の行方は？

ところで、神仏の力が込められたお札の有効期限はというと、たいていの家で一年ごとに同じ社寺から新しいお札を受けてくることから、およそ一年と考えられます。それで古くなったお札はどうするかというと、神社やお寺に納めるかドンド焼きの時に燃やしてしまうというのが一般的です。

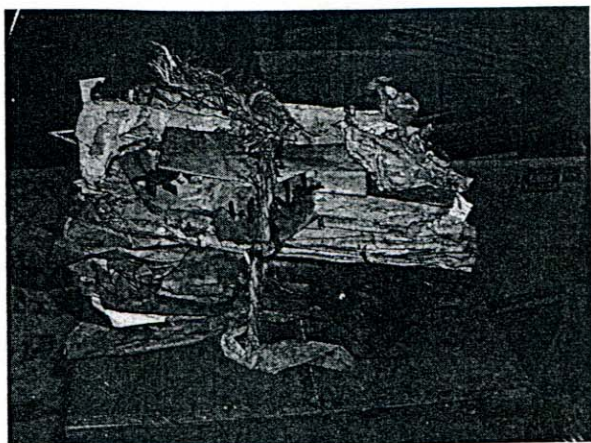
ところが中には、古くなったお札をいつまでも保管しておき、ある程度数がたまると丸めて一束にしたり俵の中に詰め込んだりして、屋根裏や屋根の梁^{はり}にしばりつけておく家も稀にですが見られました。このような家では古いお札にも呪力を認め、そのお札を数多く集めることで、より強力な力を発揮できると考えていたようです。古いお札が千枚たまれば、千枚札といって家を災難から守ってくれるといった言い伝えもところによっては聞かれます。県内では重要文化財にも指定されている美麻村の中村家住宅に残された1500枚以上のお札が有名ですが、これも家の天井裏に6つの俵に詰め込まれた状態で残されていました。

◆お札の保存状況

今回寄託を受けたお札は、篠ノ井横田にある旧家の土蔵に納められていました。土蔵二階の北側に蔵の幅いっぱい長さで棚を設け真中に神棚を置き、その前に、中にお札や玉串を入れた箱札と呼ばれる箱型のお札や、麻紐で束ねられたお札がびっしりと並べられていました。これを博物館に持ち帰り整理を行ったところその数はおよそ2500枚、主に幕末から明治大正時代にかけて発行されたお札であることがわかりました。

◆お札の中身はなんだろう？

柳澤家のお札は現当主の四代前と三代前の当主



▲束ねられたお札たち

の時代に受けたものがほとんどです。お札を発行した社寺を見ると宮城県の出雲大社の名前も見られ、かなり遠方まで足を伸ばして社寺参拝をしていたことがわかります。

お札を発行した社寺を地域的に見ると柳澤家のある旧横田村のものが全体の7%、長野市内のものが5%、長野県内の社寺からのものが35%、県外からのものが34%、不明のもの19%となり、県外では関東・中部・近畿からのものが多く、京都以西あるいは東北地方からのものは数が少なくなります。現在場所が特定できていない社寺も含めると138もの社寺からお札を受けています。そのなかで圧倒的に数が多いのは戸隠神社（550枚）、伊勢神宮（403枚）、津嶋牛頭天王（151枚）で、この3社を合わせると全体の4割を超える数になります。これらの神社は、それぞれ御師と呼ばれる神官や院坊を介して各地の信者へ定期的にお札を配る活動を展開していたところです。

◆時代によるお札の変遷

柳澤家のお札は、江戸時代のものが殆どである中村家住宅のものと比べると、幕末から明治大正と時代は新しいですが、明治政府の神仏分離政策を挟んでその前後のものを見ることができるという点で面白い資料であるといえます。同じ社寺発行のものであっても例えば戸隠神社のお札では江戸時代のものは仏教色の強い絵柄や文字が記されていますが、明治に入るとそれらが全て神道に当てはめられたものになっていく様子がわかります。時の政府の宗教政策によって信仰の証であるお札もその姿を変えざるをえなかったようです。

◆お札に託された願い

さてそれではいったい、何を願ってこれほどたくさんのお札をもらっていたのでしょうか。お札の中には「家内安全」とか「諸願成就」といった文字が記されたお札もあります。これらの文字は神社発行のお札には少なく、お寺、特に密教系のお寺が発行するお札によく見られます。その願いは先にみた家内安全はもとより、火防・病気除け・厄除け・安産・五穀豊穡など、今の私たちが日常生活の中で願う願いと変わりありません。時代が変わっても人間の願いは変わらないということでしょうか。ただ、しきりに見られる「養蚕繁盛」はその当時特有のものといえるでしょう。

◆最後に

現在の柳澤家では、新しいお札を受けると古いのはドンド焼きの時に燃やすようになっていました。また、当時に比べ一年に受けるお札の数も極

端に少なくなっています。これはお札を発行する社寺が減ってきていることや、なんといっても私たちがお札にたいしてそれほど期待をかけなくなったためなのでしょう。

柳澤家に伝えられた約2500枚のお札は、当時と今の私たちとの神仏に対する関わり合いの変化を教えてくれる資料とも言えます。(細井雄次郎)



▲お札類 (一部)

自然史館の映像装置がリニューアル

茶臼山自然史館の常設展示室には大型の映像装置などを設置した「テーマ展示コーナー」があります。その中のひとつのスライド映像装置が新しい映像装置へとリニューアルしました。

新しい映像装置は、DVDプレーヤーと50インチのプラズマディスプレイを備えた大型のビデオ映写装置で、鮮明で迫力のある大型映像を楽しむことができます。上映するのは、長野の大地の生い立ちをテーマにした、「大地はうごく!」というタイトルのオリジナルビデオです。このビデオは、博士と子供のアニメーションのキャラクターが登場し、長野盆地周辺の各地を案内しながら、

盆地と山々の生い立ち、1847年(弘化4)に起こった善光寺地震と地震の原因になった活断層の関係などについてわかりやすく解き明かすという内容です。また、「字幕解説付き」モードを選択することで、聴覚障害のある方も楽しんでいただけるようになっています。ビデオソフトは、今のところこの1種類だけですが、今後順次追加していく予定です。

この映像装置は4月初めから公開しております。この機会にぜひ自然史館へおいでいただき、上映をご覧くださいと思います。

(畠山幸司)

寄贈・寄託・購入資料の紹介

平成15年度も多く資料の寄贈・寄託をいただきました。厚く御礼申し上げます(敬称略・五十音順)

(寄贈資料) 風間多喜男(信濃町)とい棒/片桐よ志子(大室)大鋸/小林 博(南堀)戦争資料
皐月高校(徳間)謄写版/春原正毅(御幣川)養蜂道具/西澤啓之助(稲田)絵葉書/西巻カメラ(合
戦場)カメラほか/馬場祖玄(高田)掛け軸/松沢 清(吉田)ひょうそくほか/松田松二(松本市)
典籍/美濃屋(松代町)茶壺/宮澤彰正(東犀南)雛人形・古文書ほか/山口立雄(新諏訪町)春雷
筒拓本/吉原明彦(上氷鉋)そろばん/米澤清江(風間)着物・蚊帳ほか

(寄託資料) 地蔵庵(高田)掛軸/柳沢正登(篠ノ井)什器類ほか

(購入資料) 刷物(善光寺境内図・白沢の図・鯰絵など)ほか

四阿の屋根葺き替え

博物館前の池のほとりに立つ四阿の屋根が22年ぶりに葺き替えられました。四阿は1982年（昭和57）に建てられ、^{かや}萱の傷みがはげしくなったため行われたものです。

葺き替えは2月13日、古い萱を下ろす作業から始まりました。この四阿の軒には麻殻が葺いてあり、最初に屋根を葺いた職人さんは、麻殻の手に入る長野市西部の西山地域の職人さんだとわかります。丸裸となった四阿に、まず下地のよしずをつけ、麻殻を軒に葺き、次に屋根の四隅から萱を葺いて行きます。この時に使われるのがトイ棒で、萱が落ちないように、あるいは横に広がらないように屋根に刺す道具です。萱は押鉾^{おしほこ}と呼ばれる真竹に、藁縄でしばりながら下から上へと厚さを均等にしながら葺きます。この時古い萱でまだ使えるものは、雨のあたらない下の方に有効に使われます。萱の厚さは軒先で約55cmにもなります。頂上は雨があたって腐りやすいので、3重にした杉の皮で覆い、さらにグシをのせます。

萱が一通り葺き終わると、今度は刈り込みです。屋根葺き職人さんが使うハサミは、曲線のついた屋根が刈りやすいように強い反りがついています。柄の長さも長短あり、場所によって使い分けられます。図面などない中、経験をたよりに微妙な曲線をつけながら、四方を均等に刈り込んで行きます。

2月13日から始まった葺き替えは、20日間かけて3月13日に無事終わりました。屋根の面積は43m²、使った萱は伊那地方の山萱559束（1mの縄で縛った1.5m以上の萱を1束とする）。今回の葺き替えは信濃町の風間多喜男さんらの手によるものです。

萱の屋根は火事に弱いことから建築基準法の問題もあり、戦後次第に少なくなりました。需要の減少は萱場の減少、職人の減少へとつながり、現在萱葺きの職人さんは、65歳以上の方を中心に信濃町や伊那、小谷など全県で20人足らずになってしまったといえます。風間さんたちも、1年中コンスタントに萱屋根の仕事があるわけではなく、一般の住宅の屋根も施行しているとのこと。

今回の葺き替えで、四阿はまた20年先まで公園の利用者に涼しい日陰を提供してくれることでしょう。しかし、20年後にこの萱を葺き替えることのできる人がいるかが大きな問題です。

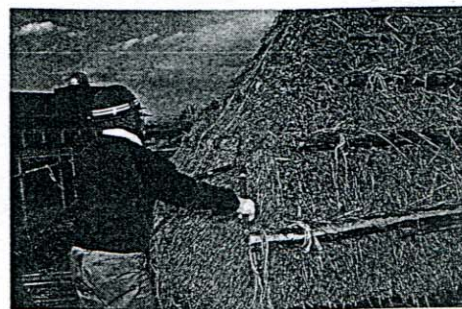
（降幡浩樹）



▲葺き替え前



▲葺き替え中
軒の麻殻とトイ棒、真竹の押鉾が見える



▲刈り込み中
柄の長いハサミを使っでの刈り込み作業



▲完成した四阿